

# 琉球大学学術リポジトリ

## 果菜類育苗の必要性 (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重, Tomoyose, Choju メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/19795">http://hdl.handle.net/20.500.12000/19795</a>

る)等のよい細菌の繁殖が多く、土をよくする腐植分の適量をもっており、肥料養分も作物にすわれ易い形態で豊かに存在している。このような土をよい地力をもっているといえるのです。それではこのようなよい土にするためにはどうすればよいのでしょうか。

## 地力を高めるには

一、耕転…むかしから「肥より鉄」「七度すけば肥いらす」といわれておりますが、何回もたがやす程、土粒子の構造を図一のように団粒化し、また風化作用を促進して土の中にある有効養分を増加します。

又耕てんをして土の乾燥の状態を十分保つほど肥料分の有効化の度合いが大きくなります。

### 説明

普通土粒の状態は粒状で土粒間のすきまが少なく水も空気もよく通れず、また植物が根をはるにも不便です。然しよく耕てんとすると下図の団粒状となり、土粒間のすきまが沢山あって水も空気もよく通り植物が根をはるのにも便利です。

二、深耕…「土一寸、米一石」のたとえのように、多肥と多収は深耕を伴って始めてかなえることが出来るのです。ただし水持ちの悪い田や、心土の悪い畑地などでは急激な深耕はさけるのがよい。それはますます水持ちを悪くするからです。次に心土の土は養分が稀薄である

から、必ず堆肥を鋤き込むことが肝要であり、徐々に深耕する方が効果的です。

三、乾土…土を乾燥すると有キ物が分解されてアンモニア化します。

乾土のききめは畑よりも水田、乾田よりも湿田が高く、冬期は特にききめがあります。沼や湖の底土をさらに乾燥して使うと効果の高いものです。

四、焼土…乾土効果をさらにつよく出したようなもので土の表層一〜二寸をけつり火をつけていぶしやきにします。土の色が風乾した場合と同じ色になります。そうすると土の中のチツソが有効化すると同時にリンサンもきいてきます。然しながら沖繩のようにやせた土地(特に砂地)ではききめが低いのであまりすすめたものではありません。

五、客土…これは(一)土性改良(二)耕土の増加(三)肥料養分補給の三つの目的を主として行います。

(一)の場合は砂質(ウシマ土壌等)に填質(シャール土壌)又は泥炭土等という性質の違う土を客土した方がよい。

(三)の場合は、耕土に近い肥えた土が望ましいものであります。秋落田に客土をする場合は堆肥を併用した方が効果的であり又泥炭地等に客土した場合は肥料分が有効果して来ますのでチツソをやり過ぎないように注意致します。

# 果菜類育苗の必要性

(一)

## 三、果菜類の市場価格と 早熟栽培の利点

果菜類を早期に収穫開始することは台風期までの収穫期間を長

くするだけでなく単価の高い時期に出荷することになり、この点でも有利な経営が出来る。

第二図から第七図までは農運市場における果菜類の斤当り卸価格の変動を示すもので細線は一九五五年六月上旬より一九五六

客土用の土として堆肥倉付近や床下の土又は乾燥した沼土、海岸の砂土を使うとききめが多いものです。

六、排水…畑では地下水の位置が地表から概ね三尺以下がよく、高い場合はよくないといわれています。従って重粘土壌や泥炭地などは特に排水することに注意すべきです。

排水後は地温が高まりチツソ成分が有効果しますから、それだけ作物によく利用される訳です。

七、酸性矯正…土壌の酸度を検定して、石灰の適量を土とよく混ぜることです。

酸度の検定や石灰の適量は村の普及員とよく相談致しましょう。

一度酸性を矯正すればききめは数年保ちますが再び酸性にもとりましますからたえず土壌の酸度に注意することが肝要です。

開拓地は一般に酸度が高いものです。

八、有機物施用…「山が里に下れば豊作」の例えもあります。客土改戸には有機物がどんな場合でも必ず必要です。

堆肥や厩肥や緑肥等をうんと増産して地力を作り上げ、土壌の両面をつねに活発にし土をつくることが増産の根本といわねばなりません。

(比 嘉 信 吉)

年五月下旬までで、太線は一九五六年六月上旬より一九五七年五月下旬までのものである。

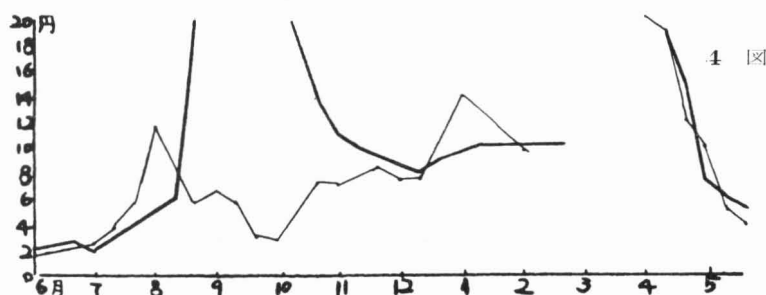
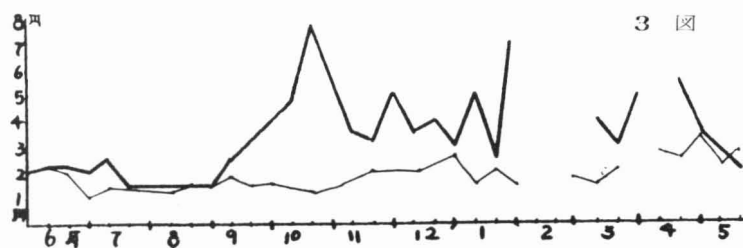
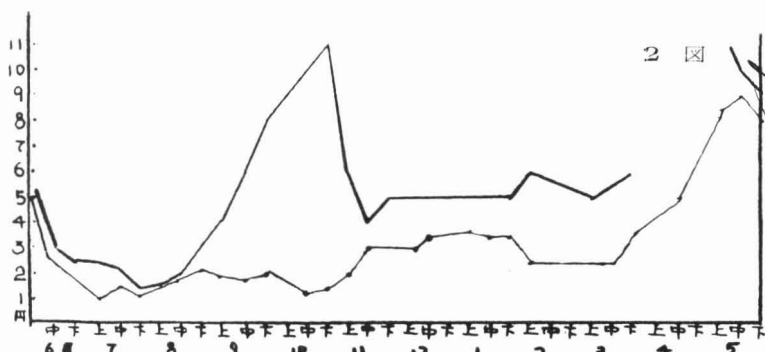
八月以降の兩年間の単価の差の大きいのは台風の関係で一九五五年には十月に一回あっただけで、果菜類に大した被害はなく、一九五六年には八月に二回、九月に一回はけしい台風に見舞われ、なす、キウリ、ニガレイシは殆んど全滅したと思われる。全般的に茅菜の過度不足を来し、残余の果菜類が急激に高騰したためである。

一般に十一月から五月までは果菜類の適期であるが、通常この期間に収穫されるものはトマトだけであり、きゅうり及びピーマンの抑制及び半促成栽培では冬期間若干保温して有利な経営が出来ると思われるが、他の果菜類ではこの期間まで収穫をのばしても有利とは思えない。

然しこの期間における果菜の需要は僅かであり、最も重要なことは果菜類を早熟栽培により四月か五月の品薄期で単価の高い時期に収穫出荷する栽培法を改善することである。かくすることにより、六月に果菜類が市場にはさんで単価

#### 四、琉球の気温と温床育苗の必要性

然らばいかなる方法で寒冷期に育苗して早期出荷するかを考慮しよう。果菜類の発芽温度は高い方が良く、三〇度〇前後を目標とする。発芽が延び、不揃となれば良好な育苗は極めて困難となる。発芽後各果菜のいわゆる育苗適温に移すが、之は第三表に記してある。ヘチマとニガレシは大体ナスに準ずる



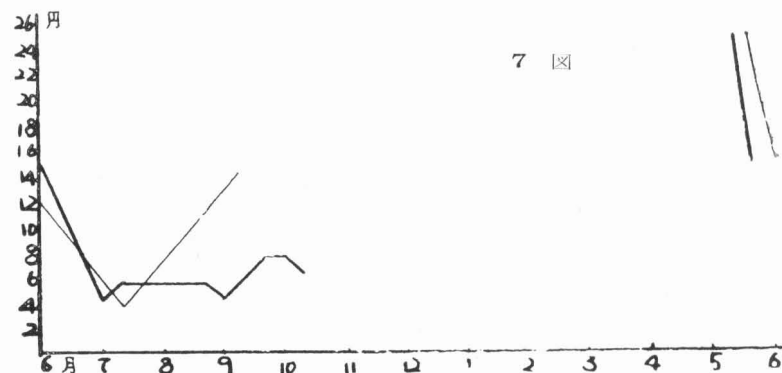
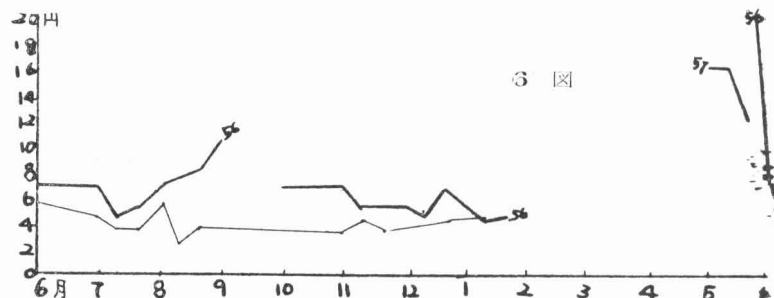
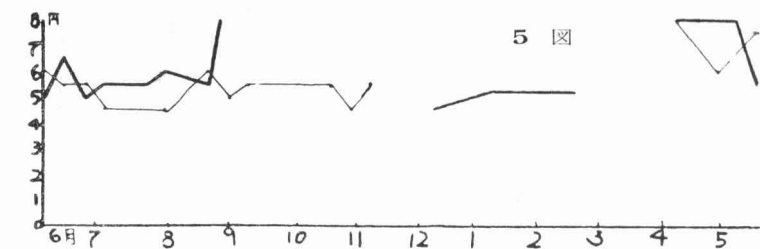
温度・℃	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温	○	16.1	16.0	17.7	20.7	23.1	26.1	27.9	27.7	26.6	23.9	20.8	17.7	22.0
平均最高気温	×	19.3	19.1	20.8	23.9	26.3	29.2	31.2	30.9	29.9	27.2	24.0	20.9	25.2
平均最低気温	×	13.1	13.1	14.7	17.7	20.3	23.6	25.1	25.0	23.9	21.0	18.0	14.8	18.2
地面温度	×	15.7	16.1	17.8	21.9	25.5	28.3	30.8	30.2	28.3	24.4	20.3	17.2	23.0
地中温度 (0.5M)	○	18.2	17.7	18.5	20.7	24.1	26.5	29.1	29.3	28.7	26.3	23.0	20.1	23.5
日照時数		108.1	98.0	124.0	150.1	162	196	276	24.7	216	178	134	118	2008
暴風日数	10m/s	14	13	11	6	5	3	4	6	7	10	12	13	104
降水総量	mm	131	130	161	157	253	269	188	266	183	164	134	105	2142

第二表 那覇の気象 統計年は気温及び降水量  
1881—1840地温1924—1938日照時数1906—1836  
暴風日数1910—1940年である。

種類	生温育適
トマト	22-24℃
ナス	24-27
とうが	22-28
かぼちや	20-22
きうり	22-24
すいか	22-28
しろうり	20-22
メロン	30-32
ピーマン	22-27

第三表  
果菜類の生育適温

と考えられる。次に琉球気象台統計資料による琉球の気温は第二表の通りである。



月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計年
地区														
宮古	17.7	17.9	19.4	21.4	25.5	26.7	27.7	27.4	27.0	24.8	22.3	19.4	23.0	1938-1955
八重山	18.0	17.8	18.7	22.2	24.8	27.1	28.2	27.9	26.9	24.1	22.0	19.4	23.2	1897-1950
南大東島	17.6	17.8	19.1	20.8	23.8	26.1	27.8	27.7	27.5	25.2	22.6	18.6	23.0	1847-1955

第四表 琉球各地の平均気温

以上の表から那覇の気温は十二、一、二、三月にかけては果菜類の生育にはやや低温に過ぎ、他地区においても充分とは言えない。  
筆者が琉大農学ビルの近くで低温では発芽、生育の悪いナス及びヘチマを使って試験した育苗結果は次の通りである  
先ず幅一・五尺、長さ二・四尺、高さ一・五尺のセメント製の鉢九個次の通り三群と三組に分けて準備した。(このようなセメント製の小温床は気温が急激に上下するへいがいはある。)

区子障無 (3)	区子障 (2)	及び子障 (1) 組	群
G	D	A	1 発熟区
H	E	B	2 床土区
I	F	C	3 処理区

## 群

(1) 發生区、稲わら九束(平均三・五〇束)に対し硫酸反當り四四匁を混入し、一月一五日ふみこむ、

## (2) 床土絶縁区

床土を入れる前に稲わら一束をしきつめ日中床土に吸収された太陽熱が床土下に移行するのを防ぐようにした。

## (3) 無処理区

土の上に直接床土を置いた。

## 組

## (1) 障子及び菰区(まこも)

日中は床内気温が三〇度以上になった時ガラス硝子を取外し、午後五時から午前八時半までカマス一枚上からおうて保温に努めるようにした。

## (2) 硝子区

日中は前組と同様な管理をした。

## (3) 無硝子区

上から何も保護しなかった。(つゞく)(友 寄 長 重)



# コナガとハイマダラノメイガ



コナガによつて全滅した大根(1956年豊見城において)

この二種はダイコン、カンラン、カブその他の十字花科作物を加害する重要害虫である。

## コナガ

### 一、虫の形

成虫は体長約六耗、はねの開張一四耗内外の小さい蛾で、全体灰かつ色を呈し、前はねの後縁に波状の黄白紋がある。卵は扁平で円形、白色半透明。幼虫は体長約九耗頭部は淡かつ色、胴部は緑色を呈する。蛹は体長約六耗、黄緑色―淡かつ色を呈する。

### 二、加害状況

年数回発生し、幼虫は葉裏で葉肉を食害する。そのため葉は葉脈と表皮が残り、被害の著しい時は地上部は完全に枯死する。特に三月頃は発生が多いので注意を要する。

### 三、防除法

DDT水和剤(一〇)の六〇〇―八〇〇倍液を作り、当初反當四―五斗を撒布する。その後作物の生長に伴い五斗―一石を約一週間置きに三回位撒布する。

DDTが得られない時はハ酸鉛又はデリス剤を撒布すればよい。

## ハイマダラノメイガ

普通ダイコンシンクイムシあるいは単にシンクイムシといっているのはこの害虫の幼虫である。

### 一、虫の形

成虫は体長約七耗、はねの開張一四耗内外の小さい蛾で、全体灰かつ色を呈し、前はねに淡色波状の二横線と黒色の腎状紋があり後はねは灰白色を